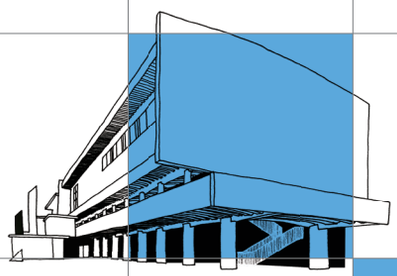
独立行政法人

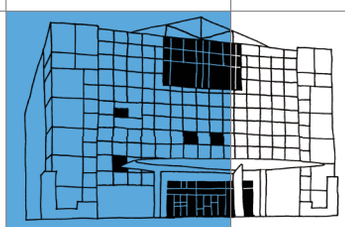
国立美術館

Independent Administrative Institution
NATIONAL MUSEUM OF ART

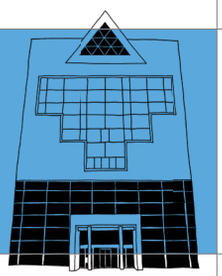


東京国立近代美術館
THE NATIONAL MUSEUM OF MODERN ART, TOKYO

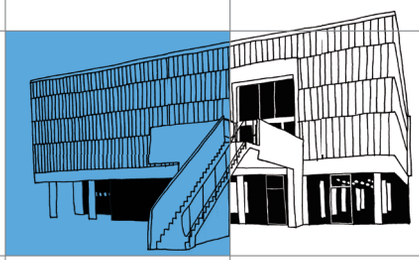
国立工芸館
NATIONAL CRAFTS MUSEUM



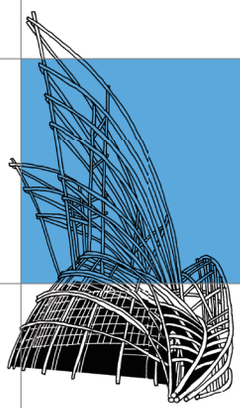
京都国立近代美術館
THE NATIONAL MUSEUM OF MODERN ART, KYOTO



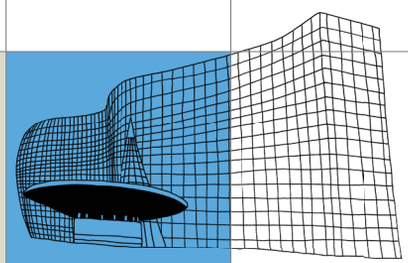
国立映画アーカイブ
NATIONAL FILM ARCHIVE OF JAPAN



国立西洋美術館
THE NATIONAL MUSEUM OF WESTERN ART, TOKYO



国立国際美術館
THE NATIONAL MUSEUM OF ART, OSAKA



国立新美術館
THE NATIONAL ART CENTER, TOKYO

国立アートリサーチセンター
NATIONAL CENTER FOR ART RESEARCH

ご挨拶

撮影：Mie Morimoto

逢坂 惠理子

独立行政法人国立美術館理事長
（国立新美術館長）

独立行政法人国立美術館は、7つの文化施設（東京国立近代美術館、国立工芸館、京都国立近代美術館、国立映画アーカイブ、国立西洋美術館、国立国際美術館、国立新美術館）と国立アートリサーチセンターを運営する法人です。

当法人は、我が国における芸術文化の創造と発展等を使命とし、展覧会による多様な鑑賞機会の提供や教育普及活動、ナショナルコレクションの形成及び活用、美術を通じた国際文化交流の推進、国内美術館活動全体の活性化に寄与するためのナショナルセンターとしての活動など、美術振興の中心的拠点として様々な事業に取り組んでおります。

令和5年度は、この使命に基づき多種多様な展覧会事業、上映会事業、作品収集事業、調査研究事業及び教育普及事業などに取り組み、展覧会・上映会には国内外からのべ360万人を超える方々にご来場いただきました。

また、令和5年3月に設置した国立アートリサーチセンターは、国内外の美術館、研究機関をはじめ社会のさまざまな人びとをつなぎ、アート振興の基盤整備および国際発信に寄与するとともに、その持続的な発展を志向する取組を行っています。令和5年度は、専門領域の調査研究に留まらず、作家・作品等に関する情報収集とデータベース化を行い、国内外へ発信するとともに、コレクションの活用促進、人的ネットワークの構築、ラーニングの拡充、アーティストの支援などに取り組みました。引き続き我が国の美術館活動全体の充実に寄与して参ります。

令和6年4月には、文化庁からマンガ・アニメ等中間生成物保存活用事業を受託し、メディア芸術作品の中間生成物等（マンガ原画、取材資料等）の資料の散逸や劣化に対応する調査研究等メディア芸術振興に資する事業を開始しました。

昨今の国際情勢による光熱費や物流コストの高騰など美術館の運営に要する経費は増大し、施設・設備の老朽化や人材の確保・育成など、多くの課題を抱える状況ですが、心豊かで多様な社会の実現と持続的な発展のために、美術や映画の変わることのない存在意義を、様々な活動を通して伝えていきたいと考えています。あらゆる人に開かれた美術館を目指し、文化芸術の多様な価値を活かした社会づくりに向けて、活動を展開して参ります。

国立美術館について

使命と役割

独立行政法人国立美術館は、我が国における芸術文化の創造と発展、国民の美的感性の育成を使命とする、美術振興の中心的拠点です。東京国立近代美術館、国立工芸館、京都国立近代美術館、国立映画アーカイブ、国立西洋美術館、国立国際美術館、国立新美術館、国立アートリサーチセンターを設置し、次の役割を果たすために、個性豊かで多彩な活動を展開しています。

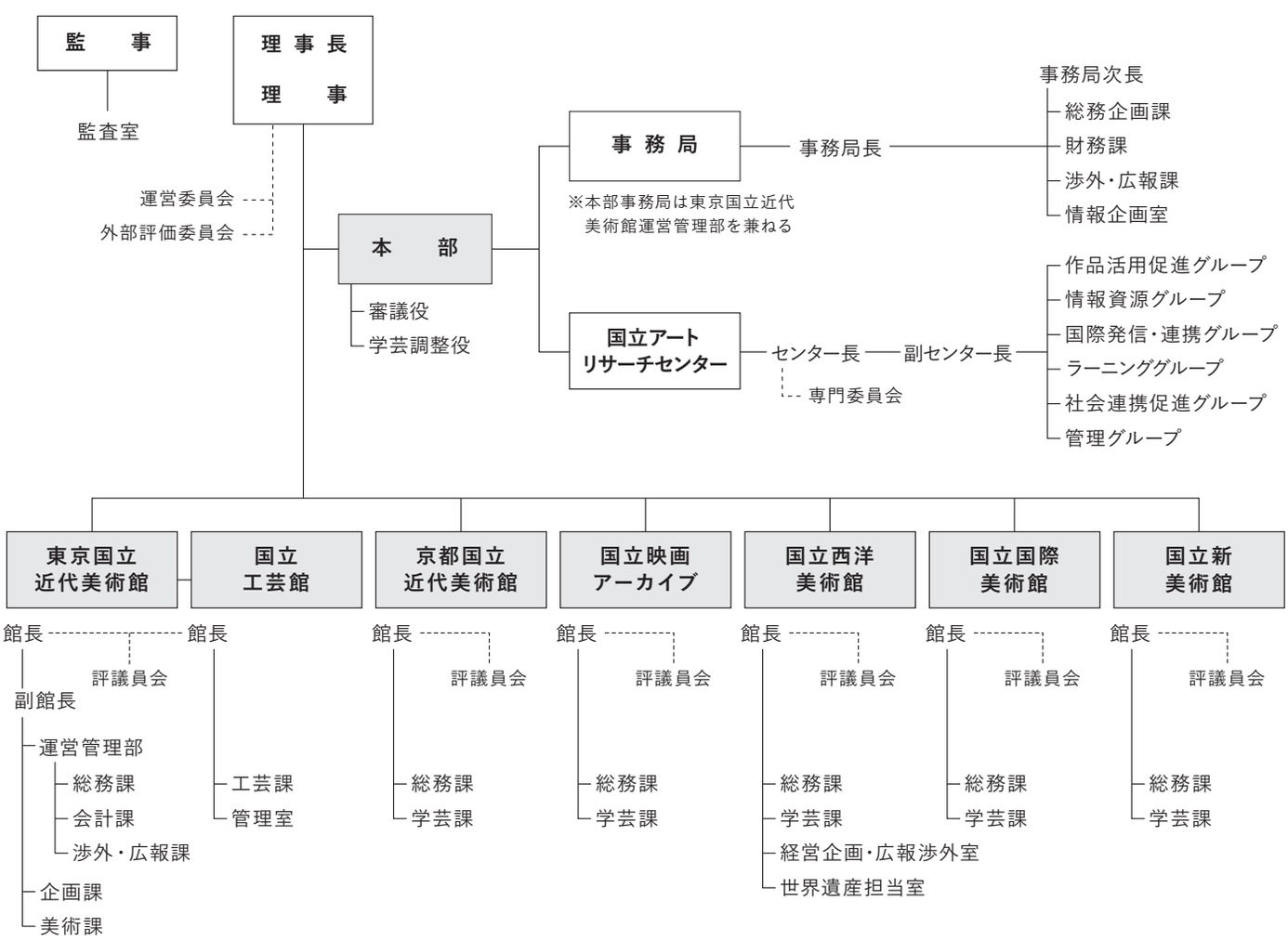
① 美術振興の中心的拠点として、多様な鑑賞機会の提供、多彩な活動の展開
② ナショナルコレクションの形成・活用・継承
③ 美術館活動全体の活性化に寄与するナショナルセンターとしての活動に取り組むこと

沿革

昭和27年(1952)	国立近代美術館が開館 事業課の一部としてフィルム・ライブラリーを開設
昭和34年(1959)	国立西洋美術館が開館
昭和38年(1963)	国立近代美術館京都分館が開館
昭和42年(1967)	国立近代美術館が東京国立近代美術館となる 国立近代美術館京都分館が館として独立、京都国立近代美術館となる
昭和44年(1969)	東京国立近代美術館にフィルムセンターを設置
昭和52年(1977)	国立国際美術館が開館 旧近衛師団司令部庁舎に東京国立近代美術館の分館として工芸館が開館
平成13年(2001)	東京国立近代美術館、京都国立近代美術館、国立西洋美術館、国立国際美術館からなる「独立行政法人国立美術館」発足 国立美術館本部設置
平成19年(2007)	国立新美術館が開館
平成30年(2018)	東京国立近代美術館フィルムセンターが国立映画アーカイブとして独立
令和 2 年(2020)	工芸館が金沢に移転し、国立工芸館として開館
令和 5 年(2023)	国立アートリサーチセンター設置

組織図

(令和6年4月1日現在)



多様な鑑賞機会の提供

1. 各美術館等の特色を生かした展覧会等の実施

国立美術館では、調査研究の成果を活かし、所蔵するコレクションを新しい切り口から多角的に展示する「所蔵作品展」や、世界の美術動向の紹介や我が国の作家・作品の再評価等を目的とする「企画展」などの展覧会を実施しています。また、マンガ・アニメなどメディア芸術や現代美術を含む様々な展覧会も行っています。

●所蔵作品展

MOMATコレクション　小企画「女性と抽象」
：東京国立近代美術館

撮影：大谷一郎

戦後から現代まで、草間彌生《No. H. Red》や福島秀子《凝視》など女性のアーティストによる多様な抽象表現を紹介しました。
（会期：2023/9/20～2023/12/3）
（令和5年度所蔵作品展総入館者数：286,612人）

「コレクション1　80/90/00/10」
：国立国際美術館

新収蔵作品の村上隆《727 FATMAN LITTLE BOY》（2017年）を核にして、1980年代から2010年代までの現代美術の動向を幅広く紹介しました。
（会期：2023/6/24～2023/9/10）
（令和5年度所蔵作品展総入館者数：124,788人）

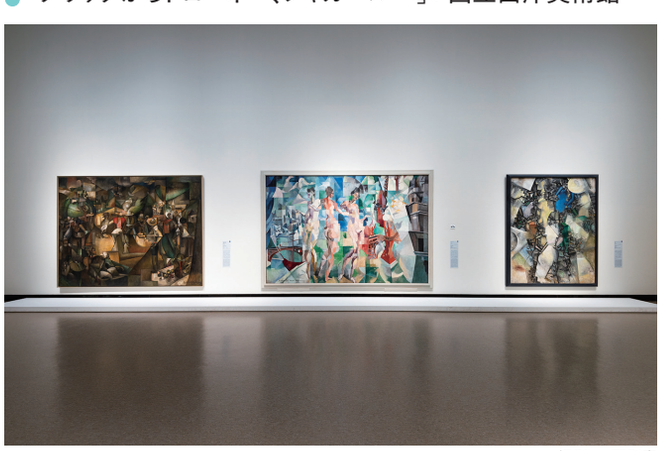
●企画展

「開館60周年記念　京都画壇の青春―栖鳳、松園につづく新世代たち」：京都国立近代美術館

撮影：河田憲政

明治末～昭和初期を近代京都画壇の青春時代ととらえ、土田麦僊（1887～1936）を中心に据え、小野竹喬、榊原紫峰、岡本神草などの代表作101点を紹介しました。
（会期：2023/10/13～2023/12/10、入館者数：23,537人）

「パリ ポンピドゥーセンター　キュビスム展―美の革命　ピカソ、ブラックからドローネー、シャガールへ」：国立西洋美術館



撮影：上野則宏

国内で約50年ぶりの開催となった大キュビスム展では、ポンピドゥーセンターからロベール・ドローネー《パリ市》を含む50点以上の日本初出品作品を借用し展示しました。
（会期：2023/10/3～2024/1/28、入館者数：222,599人）

●新しい美術の動向に関する展示

「ポケモン×工芸展―美とわざの大発見―」
：国立工芸館

人間国宝から若手まで20名のアーティストが制作したポケモンと工芸を掛け合わせた作品の展示を行いました。
（会期：2023/3/21～2023/6/11、入館者数：95,158人）

2024 Pokémon. ©1995-2024 Nintendo/Creatures Inc. /GAME FREAK inc.
ポケットモンスター・ポケモン・Pokémonは任天堂・クリーチャーズ・ゲームフリークの登録商標です。

「LOVEファッション―私を着がえるとき」
：京都国立近代美術館

撮影：浅野豪

京都服飾文化研究財団の18世紀から現代までの衣装コレクションを中心に、現代美術、文学作品を交えて、ファッションに託された人々の多様な願望を見つめ直すとともに、着る側である「私」をめぐる問いの現在形を探りました。
（会期：2024/9/13～2024/11/24、入館者数：37,659人）

「~~インポッシブル~~・アーキテクチャー――建築家たちの夢」
：国立国際美術館

黒川紀章、安藤忠雄、ザハ・ハディドなどによる20世紀以降のアンビルト／未完の建築に焦点をあて、図面、模型、CGなどを通して、未だ見ぬ新たな建築の姿を展望しました。
（会期：2020/1/7～2020/2/28、入館者数：21,386人）

「庵野秀明展」
：国立新美術館

「庵野秀明展」会場風景　提供：庵野秀明展

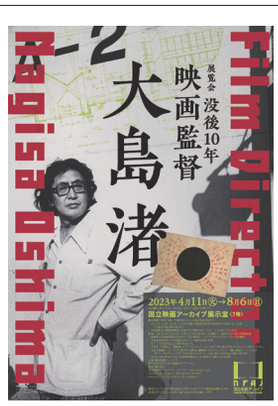
アニメ・特撮・実写の垣根を超え常にトップランナーとして活躍し続け、国際的にも評価の高い映像作家である庵野秀明のこれまでの活動を、本人の作品だけでなく、作家が影響を受けた作品も含め、多角的な視点で紹介しました。
（会期：2021/10/1～2021/12/19、入館者数：145,131人）

●映画上映、映画関連展覧会

上映会
「返還映画コレクション（1）――第一次・劇映画篇」
：国立映画アーカイブ

アメリカ議会図書館から1967－8年にかけて返還を受けた劇映画の中から、『月夜鴉』（1939）や『残菊物語』（1939）など戦中期の名作を上映しました。
（会期：2023/11/28～2023/12/24、入館者数：6,471人）

展覧会
「没後10年
映画監督 大島渚」
：国立映画アーカイブ



大島渚監督が自ら体系的に遺した膨大な作品資料や個人資料をベースに、企画の監修には『大島渚全作品秘蔵資料集成』編著者樋口尚文氏を迎え、大島の映画人生を俯瞰しました。
（会期：2023/4/11～2023/8/6、入館者数：7,386人）

2. 全国の公私立美術館と連携した展覧会の実施

公私立美術館と連携して、国立美術館の所蔵コレクションを公私立美術館に貸し出し、連携先美術館と展覧会を共同企画すること等により、地域における鑑賞機会を充実するとともに、地域の美術館の活性化を支援する取組を行っています。
また、優れた映画の巡回上映も行っています。

●コレクション・ダイアローグ

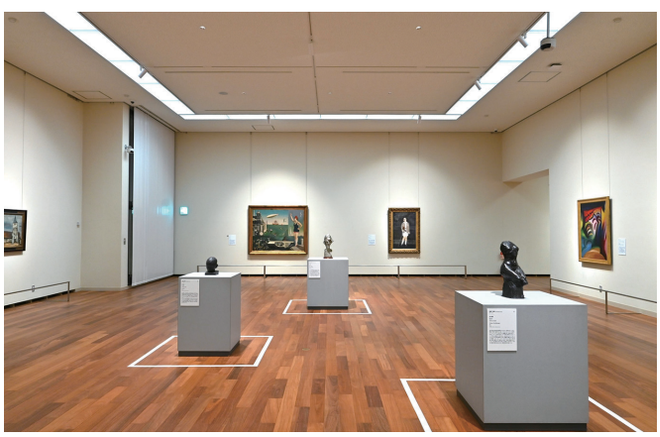
国立美術館 コレクション・ダイアローグ
Collection DIALOGUE

国立美術館のコレクションに連携先美術館のコレクションを加え、共同で企画・構成する展覧会です。令和７年度から実施します。

●巡回展

国立美術館の所蔵作品を中心として、連携先美術館とともに企画する展覧会です。

「20世紀美術の冒険者たち―名作でたどる日本と西洋のアート」：熊本県立美術館



東京国立近代美術館から重要文化財 萬鉄五郎《裸体美人》や和田三造《南風》を含む59点を貸し出し、熊本県立美術館及びもう一つの巡回先である高松市美術館の作品とあわせて展示しました。
（会期：2023/7/22～9/18）

●コレクション・プラス

国立美術館 コレクション・プラス
Collection PLUS

連携先美術館のコレクションに国立美術館の所蔵作品1点から数点を加えて構成する展覧会です。令和６年度から実施します。

「鴨居玲のスペイン時代―スペイン・バロックの巨匠ジュゼペ・デ・リベーラの作品とともに」：長崎県美術館

プレ事業として、国立西洋美術館のジュゼペ・デ・リベーラ《哲学者クラテース》を貸し出し、長崎県美術館所蔵の鴨居玲のスペイン時代の作品とあわせて展示しました。
（会期：2023/4/7～2023/6/11）

●巡回上映

優秀映画鑑賞推進事業：国立映画アーカイブ

全国各地の公立文化施設等101会場にて、35㎜フィルム等による日本映画の巡回上映を実施。88作品22プログラムのなかから会場の希望に応じて上映しました。

こども映画館 スクリーンで見る日本アニメーション!：国立映画アーカイブ

（一社）コミュニティシネマセンターと共催で、こどもも大人も楽しめる日本アニメーション映画の上映会を各地で開催しました。

3. 現代作家や国が顕彰・育成してきた芸術家のための発表機会の提供

これからの我が国の芸術活動を牽引する優れた芸術家や現代作家に発表の機会を与え、積極的な紹介を行っています。

「大巻伸嗣　Interface of Being　真空のゆらぎ」：国立新美術館

撮影：木奥惠三

大巻伸嗣（1971年生）は、身体の感覚を揺さぶるような大規模なインスタレーションを創り出してきた現代美術家です。本展覧会では、天井高8m、2,000m²の展示室をダイナミックに使って開催されました。
（会期：2023/11/1～2023/12/25、入館者数：136,126人）
（本展により大巻伸嗣は令和5年度第74回芸術選奨文部科学大臣新人賞受賞）

「蔡國強　宇宙遊 ―〈原初火球〉から始まる」：国立新美術館

撮影：顧剣亨　提供：蔡スタジオ

蔡國強（1957年生）は、1986年から10年、日本滞在中に火薬を用いた作品を発展させた現代美術作家です。本展覧会では東京での個展「原初火球」（1991）を起点に、AIを用いた新しい火薬絵画にいたるまで、彼の稀有な創造の軌跡をたどりました。
（会期：2023/6/29～2023/8/21、入館者数：80,789人）
（本展により蔡國強は令和5年度第74回芸術選奨文部科学大臣賞受賞）

4. 快適な観覧環境の提供

美術作品を直接鑑賞する機会を充実させるため、多様な方々に美術館に来ていただけるよう、美術館へのアクセシビリティを高める取組を推進しています。このため、館内表示やリーフレット、展示解説や音声ガイドなどの多言語化や多言語による所蔵作品展チケットのオンライン販売を進めるとともに、施設のバリアフリー化などを進めています。

国立美術館パンフレット（日本語、英語、韓国語、中国語（簡体字、繁体字））

各館窓口における筆談対応

子どもを連れて美術館に行きやすい環境づくりにも力を入れており、周囲に気兼ねなく鑑賞できる「ファミリーデー」の実施、鑑賞ツールの配布や子供向けワークショップの開催、特別な鑑賞プログラムの提供などを行うとともに、所蔵作品展の高校生以下又は18歳未満の子どもの入場料を無料としています。また、発達障害のある方とその家族に向けた、やさしい文章と写真による来館案内冊子「ソーシャルストーリー」を作成しています。

「Family Day こどもまっと」：東京国立近代美術館

来館者案内冊子「Social Story はじめて美術館にいきます。」

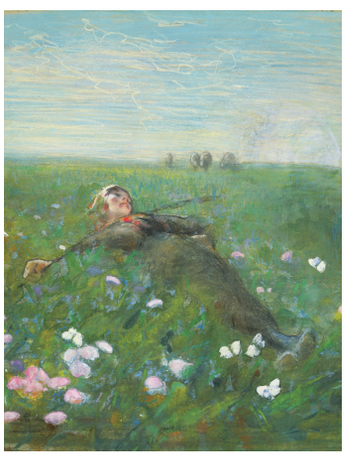
ナショナルコレクションの形成

国立美術館は、我が国の近現代美術及び海外の美術を体系的・通史的に提示しうるナショナルコレクションを形成し、これらの貴重な国民的財産を適切に保存・管理し、確実に後世に継承します。

1. 作品の収集

国立美術館では、各館において定めた収集方針に基づき、外部の知見も参考に、価格の妥当性等に検討しつつ、体系的・通史的にバランスの取れた所蔵作品の充実を図っています。近年は、コレクションのジェンダーバランスの確保や作家の地域性等の観点を重視するとともに、国内外の有望現代作家作品の同時代収集にも取り組んでいます。

1　撮影：エス・アンド・ティ フォト



2

3

4

5　Photo by Nick Ash

1. **板谷波山《彩磁紫陽花模様花瓶》1915年**
   釉下彩により紫陽花を描き、その上からマット調の釉薬を施した彩磁の花瓶で、「農商務省第三回圖案及應用作品展覽會」で三等賞を受賞。（国立工芸館所蔵）

2. **ジョヴァンニ・セガンティーニ《花野に眠る少女》1884－85年**
   セガンティーニはミラノとコモのあいだのブリアンツァ地方で、農民や羊飼いたちの姿を描きました。本作はそうしたもののひとつ。1886年以降はスイスのアルプス山間部に居を定め、高地の山々とそこに暮らす人々の生活を筆触分割の手法で描き出しました。（国立西洋美術館所蔵）

3. **竹内栖鳳《日稼》1917年**
   戦前の京都画壇を代表する日本画家による貴重な人物画。労働する女性をモチーフにした本作は、栖鳳の人物画の中で最大かつ最後の意欲作。（東京国立近代美術館所蔵）

4. **岸田劉生《外套着たる自画像》1912年**
   ゴッホ風の絵を数多く制作した時期の劉生は、白樺派の武者小路実篤をはじめ多くの友と出会い、感化を受け、「第二の誕生」を実感しました。朗らかな気分と強い自身がそのまま表出されたような20歳の自画像。（京都国立近代美術館所蔵）

5. **レオノール・アントゥネス《道子 #6》2023年**
   レオノール・アントゥネスは、20世紀に活躍した女性のデザイナーらの活動を丁寧に調べ、オマージュを捧げる作品を多数制作してきました。本作は、バウハウスで学び、テキスタイルデザイナーとして活動した山脇道子による織物のデザイン原画から着想を得た作品。（国立国際美術館所蔵）

2. 所蔵作品の修復・保存

貴重なナショナルコレクションを後世に確実に受け継ぐため、作品の修復は重要な課題です。国立美術館では、民間の修復家と連携しつつ、特に緊急性の高い作品に対して重点的に対応しています。また、所蔵作品は民間の倉庫も活用して適切な保管を行っています。

絵画修復の様子：国立西洋美術館

現代美術作品修復の様子：国立国際美術館

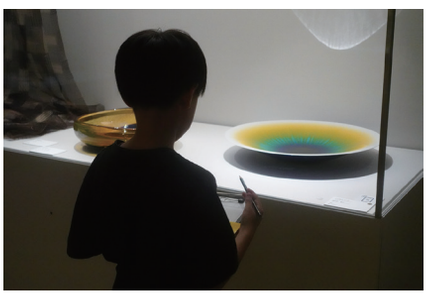
教育普及活動の充実

学校やボランティアと連携し、できるだけ多くの方にご参加いただけるプログラムや、障害のある方・訪日外国人などの少数者を対象とするプログラムを実施しています。教育的配慮をもって、多様な利用者、鑑賞者の美術と美術館の概念を広げるような取り組みを各館が実施しています。

Let's Talk Art!
：東京国立近代美術館

対話を交えながら所蔵作品のハイライトを紹介する英語プログラムです。

こども工芸館
：国立工芸館



スタンプラリー付きセルフガイドをもって会場をめぐり、絵と言葉で作品を紹介するワークシート「図鑑カード」で鑑賞のアウトプットを促すプログラム。主に夏季展覧会中に実施します。

感覚をひらく
：京都国立近代美術館

撮影：衣笠名津美

地域の盲学校や大学、作家や専門家と連携し、障害の有無を超えて、誰もが美術館を訪れ、体験できるようなプログラムを創造、構築しています。

こども映画館
：国立映画アーカイブ

映画の歴史やフィルムの仕組みも学びながら、映画を鑑賞するプログラム。アニメーションや無声映画の弁士・伴奏付き上映など、日ごとに多様なプログラムを実施しています。

建築ツアー
：国立西洋美術館

ボランティア・スタッフによるツアーです。世界遺産に登録されたル・コルビュジエの本館と前庭を一緒に歩きながら案内します。参加者が「空間を体感すること」を大切にしています。

びじゅつあー
：国立国際美術館

対話をしながら作品を鑑賞するプログラム。対象年齢を細かく設定し、年齢にあわせて実施しています。

NACT YOUTH PROJECT 2023 新美塾!
：国立新美術館

13〜18歳のユースがアーティストとともに表現することの楽しさを学ぶ、半年間にわたるプログラムを2022年より実施しています。

ラーニングチャンネル動画集
：国立アートリサーチセンター

美術館のワークショップ等、様々な取組を「学び」という視点で集め、動画で発信しています。

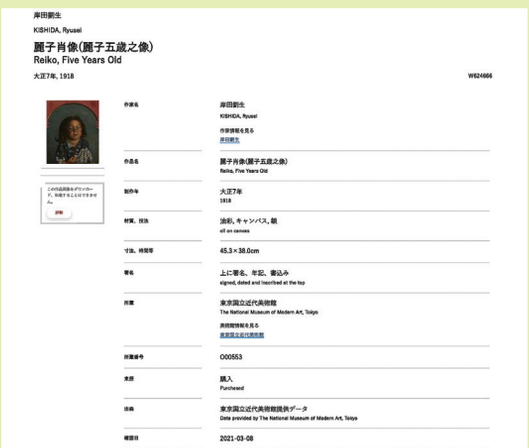
ナショナルセンターとして我が国の美術館活動全体の活性化に寄与

1. 美術に関する情報拠点

美術に関する理解促進及び国内外の美術研究促進のため、国立美術館所蔵作品等のデジタル化、データベース化を進めています。また、我が国美術の総合的な情報発信拠点として、全国の美術館と連携を進め、美術館等施設が収蔵する美術品や近現代に活躍し我が国の芸術の発展に寄与した作家、メディア芸術に関するデータベース化等も進めています。

全国美術館収蔵品リサーチ「SHŪZŌ」
https://artplatform.go.jp/ja/collections

日本全国の美術館・博物館が収蔵する作品のデータベースです。収録範囲は日本近現代のアート作品。各館から提供された情報に基づき、作家名、作品名、制作年、材質・技法、寸法・時間、所蔵先等の項目が記載されています。



日本アーティスト事典
https://artplatform.go.jp/ja/artists

日本の近現代アーティストに関する総合事典（オンライン版）です。収録対象は日本の文化芸術の発展に寄与した作家。収録範囲の上限は明治時代以降に活躍した作家、下限は1995年以前生まれの作家です。

メディア芸術データベース
https://mediaarts-db.artmuseums.go.jp/

日本のマンガ、アニメーション、ゲーム、メディアアートのデータベースです。国内の関連機関・団体のご協力のもと、各分野の作品情報や所蔵情報、催事等の情報を収録しています。

国立美術館サーチ（試験公開版）
https://crosssearch.artmuseums.go.jp/

国立美術館（東京国立近代美術館、国立工芸館、国立映画アーカイブ、京都国立近代美術館、国立西洋美術館、国立国際美術館、国立新美術館）のコレクションや情報資料を横断的に検索できるサイトです。

フィルムは記録する
―国立映画アーカイブ歴史映像ポータル―
https://filmisadocument.jp/

国立映画アーカイブの所蔵フィルムのうち、文化・記録映画やニュース映画は日本映画だけで5万本近くに及びます。これまで上映や放送等の機会が限られていたこれらの歴史映像群を、全篇視聴可能な状態で配信するウェブサイトです。令和5年度末現在で、題材も撮影場所も多彩な176作品を公開しています。

2. 全国の美術館の活動支援

全国の美術館の活動を支援する観点から、専門人材の育成、美術館活動に関する情報提供などを行っています。

美術館を活用した鑑賞教育の充実のための指導者研修

国立美術館の展示室を活用しながら教員と学芸員が学び合う研修を実施しています。

キュレーター研修、インターンシップ

公私立美術館の学芸担当職員を対象としたキュレーター研修、美術館活動を担う人材の育成に資するようインターンシップを実施しています。

3. 国内外の最新の知見共有と人的交流促進

国内外の先進事例を共有するためのレクチャー・シンポジウムなどの開催や、国内外における美術館や美術関係者のネットワークの構築を推進しています。

文化財修復処置、保存修復に関するワークショップ

海外から専門家を招いて、博物館・美術館等の担当者に知見を共有しています。(2023年10月25日～27日　モジュラー・クリーニング・プログラムの利用について)

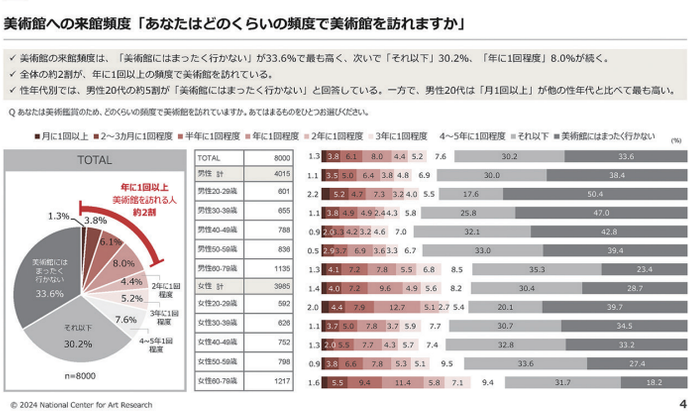
NCARスタディ・ツアー

日本で活動するキュレーターや研究者を海外に派遣し、各々の活動や研究領域の理解を深める機会をサポートしました。(2023年11月韓国)

合理的配慮のハンドブック

2024年4月の障害者差別解消法の改正を踏まえ、ミュージアムにおける「合理的配慮」の説明とともに国内の事例を紹介し、刊行物を配布しています。

美術館に関する意識調査(関東・関西エリア)



2023年度「美術館に関する意識調査」(関東エリア) p.4

美術館に関連する様々な検討に役立てていただくため、美術館に関する意識調査(関東・関西エリア)の調査報告書をウェブサイトで公開しています。

https://ncar.artmuseums.go.jp/reports/museumsandsociety/awarenesssurveys/themedreports/post2024-1202.html

MOMAT 東京国立近代美術館

東京国立近代美術館長
小松 弥生

美術館の役割のひとつとして、「対話を生み出す」ことがあります。作品との対話、作品同士の対話を楽しむ、一緒に来た人との対話、美術館で会った人との対話、鑑賞後の対話、様々あります。美術作品そのものが、作家が生きた時代や社会情勢、あるいは自分自身と対話しながら制作したものと言えましょう。

東京国立近代美術館では、ガイドスタッフによる毎日の所蔵品ガイド、Let's Talk Art（英語による所蔵品ガイド）、おやこでトーク、こどもまっとなど、対話の機会をたくさん用意しています。

美術館での対話が、人々の相互理解を深め、活気があり平穏な社会の形成に役立つものになることを願っています。

休憩コーナー「眺めのよい部屋」

美術館の春まつり　前庭の様子（2022年撮影）　撮影：三嶋一路

東京国立近代美術館は、昭和27（1952）年に設置された日本で最初の国立美術館です。明治時代から求められていた、同時代の美術を展示する機能と近代美術を収集・保管・展示する機能とを有しています。いつでも、19世紀末から今日に至るまで、日本の近現代美術の流れを世界の潮流の中でたどるMOMATコレクション展をご覧いただくことができます。

年数回のマスコミ各社との共催展や特別展の開催のほか、所蔵品ガイドの実施、子ども対象の事業、企業向けのワークショップなど教育普及事業にも力を入れています。

本館の建物は、谷口吉郎氏の設計によるモダニズム建築です。平成13（2001）年に、坂倉建築研究所の設計による増改築を行い、アートライブラリを開設するとともに、当時の美術館にはまだ珍しかったレストランも設置しました（現在はラー・エ・ミクニ）。

● 略年表

昭和27年（1952）	京橋・日活本社ビルを改修し、国立近代美術館が開館
昭和38年（1963）	国立近代美術館京都分館が開館
昭和42年（1967）	国立近代美術館は東京国立近代美術館となり、国立近代美術館京都分館は独立して京都国立近代美術館となる
昭和44年（1969）	千代田区北の丸公園地区の現在地に美術館（本館）が移転
昭和52年（1977）	重要文化財・旧近衛師団司令部庁舎を利用し工芸館が開館
平成11年（1999）	本館増改築工事着工のため休館
平成13年（2001）	独立行政法人国立美術館　東京国立近代美術館となる 本館増改築工事が完了
平成14年（2002）	リニューアル・オープン記念展「未完の世紀：20世紀美術がのこすもの」を開催
平成24年（2012）	開館60周年記念特別展「美術にぶるっ！ ベストセレクション　日本近代美術の100年」を開催
平成30年（2018）	フィルムセンターは独立して国立映画アーカイブとなる
令和 2 年（2020）	工芸館が東京から石川県金沢市に移転して国立工芸館となる
令和 5 年（2023）	開館70周年記念展「重要文化財の秘密」を開催

https://www.momat.go.jp/

国立工芸館
National Crafts Museum

国立工芸館長
唐澤　昌宏

国立工芸館は、19世紀末期から現在に至る日本の工芸を中心に、広く国内外の工芸・デザイン作品を収集・保管し、展覧会や教育普及活動などをとおして、それぞれの魅力を紹介しています。

令和５年度は、移転後としては初めて近隣美術館との合同企画展や、サブカルチャーとタッグを組んだ挑戦的な試みの展覧会などで多くのお客様に楽しんでいただきました。

自粛してきた対面による体験型イベントも積極的に行い、幅広い世代の方々に、その奥深さに触れていただいています。

これからも、皆様にとって親しみやすく楽しめる場を目指していきます。

撮影：太田拓実

展示室

人間国宝・松田権六の仕事場

国立工芸館は、昭和52（1977）年に東京国立近代美術館工芸館として東京の皇居北側に位置する北の丸公園に開館した、日本を中心とする近現代の工芸・デザイン作品を専門とする美術館です。

令和2（2020）年に、日本海側初の国立美術館である通称「国立工芸館」となり、石川県金沢市へ移転・開館。令和3（2021）年には通称を正式名称に改め、工芸文化の発信拠点としての新たなスタートを切りました。

建物は、明治期に建てられ、平成9（1997）年に国登録有形文化財となった、旧陸軍第九師団司令部庁舎及び旧陸軍金沢偕行社を、国立工芸館移転・活用のために石川県と金沢市が整備し、移築・復元したものです。

● 略年表

昭和52年（1977）	旧近衛師団司令部庁舎（昭和47（1972）年国指定重要文化財）を利用し、千代田区北の丸公園に開館
平成28年（2016）	政府関係機関移転基本方針により、石川県への移転が決定
令和 2 年（2020）	移転に向け、東京での活動を終了 旧陸軍第九師団司令部庁舎及び旧陸軍金沢偕行社の整備が完了 「国立工芸館」として石川県金沢市の現在地に移転・開館

https://www.momat.go.jp/craft-museum

MoMAK 京都国立近代美術館

MoMAK The National Museum of Modern Art, Kyoto

撮影：表恒匡

京都国立近代美術館長
福永 治

京都国立近代美術館は、2023年4月に60周年を迎え、年間を通じてこれまでの活動を振り返る企画展を開催しました。また、当館の展覧会活動をはじめとした周年事業に対し、各企業からご賛同、ご寄附を賜り、開館日の4月27日には、関係者をお招きし「開館60周年記念 Re: スタートライン 1963−1970/2023 現代美術の動向展シリーズにみる美術館とアーティストの共感関係」内覧会と合わせ、記念のセレモニーを行いました。

一方、これまでの間に収集した13,000点以上に及ぶ豊富なコレクションを4階ギャラリーで季節ごとに作品を入れ替えて展示し、広くお楽しみいただいています。今後も魅力ある美術館を目指して活動してまいります。

緑豊かな岡崎公園、平安神宮の参道と琵琶湖疏水に面して建つ京都国立近代美術館は、京都市の誘致により、市勧業館別館を改装して昭和38（1963）年3月1日に国立近代美術館京都分館として発足。昭和42（1967）年6月1日、独立して京都国立近代美術館となりました。

当館では、京都を中心とした西日本の美術作品を絵画、版画、彫刻、工芸、建築、デザイン等から写真、映像に至るまで多様な作品やその他の資料を収集、展示して、鑑賞の機会を提供するとともに、これに関する調査研究をおこなっています。

新館の設計は槇文彦によるものです。

コレクション・ギャラリー

ロビー

撮影：河田憲政

● 略年表

昭和38年（1963）	前年、京都市から勧業館別館（現在地）の国への譲渡を受け、これにより国立近代美術館京都分館が設置
昭和42年（1967）	国立近代美術館京都分館は、独立して京都国立近代美術館となる
昭和61年（1986）	新館が竣工、10月25日新館開館 常設展示会場（現コレクション・ギャラリー）を開設
平成13年（2001）	独立行政法人国立美術館　京都国立近代美術館となる
平成25年（2013）	開館50周年記念特別展「交差する表現　工芸／デザイン／総合芸術」開催
令和 5 年（2023）	「開館60周年記念 Re: スタートライン 1963−1970/2023 現代美術の動向展シリーズにみる美術館とアーティストの共感関係」開催

https://www.momak.go.jp/

国立映画アーカイブ
National Film Archive of Japan

©Pamela Gentile

国立映画アーカイブ館長
岡島　尚志

「日本で唯一の映画に関する国立機関」――それが国立映画アーカイブです。

その名に相応しく、わが国の映画遺産を可能な限り網羅的に収集し、日々の調査・研究や補修・修復に努めており、現在、8万7千本を超える映画フィルムが、膨大な関連資料と共に保存されるに至っています。

公開事業では、京橋本館を中心に年間500作品以上を上映し、貴重な映画資料の展覧会を開催し、さらに内外の上映会等にも作品の貸出を行うとともに、近年は歴史映像の配信にも力を入れています。

未知の映画をご自身で発見するために、どうぞお立ち寄りください。

長瀬記念ホール OZU

相模原分館

平成30(2018)年3月まで東京国立近代美術館の映画部門であったフィルムセンターは、平成30(2018)年4月1日に独立し、独立行政法人国立美術館の6 館目の組織となる「国立映画アーカイブ」として新たな一歩を踏み出しました。本館では、大小2 つの上映ホールと展示室、図書室を用いた様々な事業を実施しています。また、神奈川県相模原市にある相模原分館では、専用の施設で映画フィルムや関係資料の長期保存に取り組んでいます。

本館と相模原分館映画保存棟 I の設計は蘆原義信、映画保存棟 II・III は安井建築設計事務所によるものです。

● 略年表

昭和27年(1952)	京橋・日活本社ビルを改修し、国立近代美術館が開館。事業課の一部として、国立機関初のフィルム・ライブラリーを開設
昭和44年(1969)	東京国立近代美術館(本館)の施設移転に伴い、フィルムセンターを設置、翌昭和45(1970)年開館
昭和61年(1986)	神奈川県相模原市に映画フィルム専用保存庫として、フィルムセンター相模原分館が竣工
平成 3 年(1991)	フィルムセンター新営工事に着手
平成 7 年(1995)	新フィルムセンターが開館
平成23年(2011)	フィルムセンター相模原分館収蔵庫増築工事が竣工、相模原分館の保存棟を映画保存棟 I・II と命名
平成26年(2014)	映画保存棟 III(フィルムセンター相模原分館重要文化財映画フィルム保存庫)が竣工
平成30年(2018)	独立行政法人国立美術館の6館目「国立映画アーカイブ」として平成30年4月1日に設置

https://www.nfaj.go.jp/

国立西洋美術館
The National Museum of Western Art

国立西洋美術館長
田中　正之

1959年の開館以来、西洋美術の歴史に親しみ、理解を深めるための様々な活動を続け、令和5年度には常設展示のみをご覧いただいた方だけでも30万人、企画展も含めればおよそ100万人の来館者をお迎えしました。

当館の役割の一つは日本と西洋文化の接点となることです。フランスの一地方を描いた西洋と日本の作品を扱った企画展「憧憬の地ブルターニュ」は、まさに西洋と日本の活発な文化交流に光を当てた展覧会でした。

文化の力とは、多様な文化が影響し合い、変容していくダイナミズムにあります。そのような文化のダイナミズムを伝える場として当館をさらに発展させたいと考えています。

19世紀ホール　本館1F展示室

本館2F展示室

国立西洋美術館は、広く西洋美術全般を対象とする国内唯一の国立美術館として、昭和34（1959）年に開館しました。

当館はフランス政府から寄贈返還された松方コレクションを基礎とし、西洋美術に関する作品の鑑賞の機会を提供することを中心に、作品及び資料の収集、調査研究、保存修復、教育普及、出版物の刊行等の事業を展開しています。

本館は、ル・コルビュジエの設計によるものであり、平成28（2016）年に国立西洋美術館を構成資産に含む「ル・コルビュジエの建築作品―近代建築運動への顕著な貢献―」が、世界文化遺産に登録されました。

● 略年表

昭和34年（1959）	フランス政府―日本政府間の松方コレクション寄贈返還の正式調印 国立西洋美術館が開館
昭和54年（1979）	新館がオープン
平成10年（1998）	企画展示館を増築、本館を耐震改修（免震化）、新館を改修しリニューアルオープン
平成13年（2001）	独立行政法人国立美術館　国立西洋美術館となる
平成19年（2007）	本館が国の重要文化財に指定
平成21年（2009）	園地が国の登録記念物に指定
平成28年（2016）	国立西洋美術館が第40回世界遺産委員会において、世界遺産一覧表に記載
令和 4 年（2022）	前庭を改修しリニューアルオープン

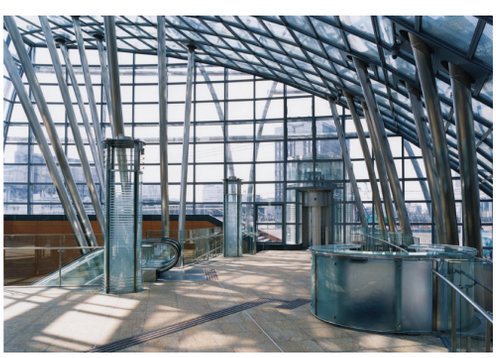
https://www.nmwa.go.jp/jp/index.html

国立国際美術館
THE NATIONAL MUSEUM OF ART, OSAKA

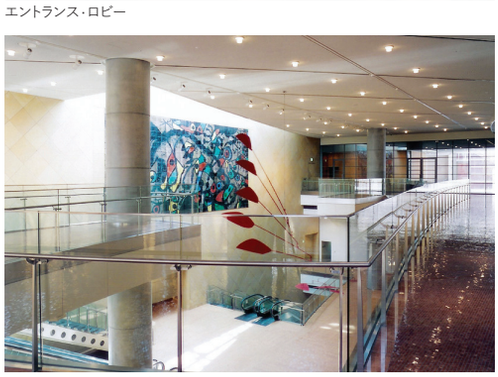
国立国際美術館長
島　敦彦

国立国際美術館は、平成16（2004）年11月に大阪・中之島に新築移転して20年を迎えました。昭和52（1977）年から数えると間もなく50年、第二次世界大戦後の国内外の現代美術を主導的に紹介してきました。

令和5（2023）年度は、定評のある海外作家に、比較的若い国内作家を加えた企画展などを開催しました。現代美術が国際的に注目を集める中で、近年は非欧米圏の動向や女性作家の活動にも注視し、さまざまな切り口で収集・展示活動を展開すると同時に、将来を担う子供たちにとっても欠かせない場所として美術館が親しまれるように一層努めてまいります。



エントランス・ロビー



エントランス・ホールと吹き抜け

国立国際美術館は、昭和52(1977)年、旧万国博美術館を活用し、主として現代美術を中心とした作品を収集・保管・展示し、関連する調査研究及び事業を行うことを目的に開館し、平成16（2004）年11月に大阪・中之島に世界でもめずらしい、完全地下型の美術館として新築、移転しました。

当館は、現代美術を発信する美術館として、国内外の美術の動向を幅広く紹介し、皆様の多様な期待に応えるための活動に積極的に取り組み、歴史と文化を継承する大阪・中之島の地における文化の拠点のひとつとして活動しています。

新館の設計はシーザー・ペリによるものです。

● 略年表

昭和52年(1977)	旧万国博美術館を活用し、国立国際美術館が開館
平成 5 年(1993)	当館評議会において、大阪市内への新築移転の方針を決定
平成11年(1999)	新館建築工事に着手
平成13年(2001)	独立行政法人国立美術館　国立国際美術館となる
平成16年(2004)	1 月　移転準備のため、休館となる
	11月　新館グランドオープン

https://www.nmao.go.jp/

新国立新美術館
THE NATIONAL ART CENTER, TOKYO

国立新美術館長
逢坂 恵理子

コレクションを持たない国立新美術館は、美術のみならず、ファッション、デザイン、建築、マンガ、アニメーションなど、幅広い世代に訴えかける多様な展覧会を開催しています。思いがけない作品との出会いを五感で受け止め楽しんでいただけるよう、ダイナミックなギャラリー空間やパブリックスペースを活かした展示を心がけています。

令和5年度は、親子や10代を対象とした教育プログラムや公募団体展も含め、年間総計227万人の方にご来館いただきました。当館は人々がさまざまな芸術に親しみ、共生や多様性を模索し推進する活動を継続いたします。

外観(正面)

ホワイエ

2024.08.27
1階ロビーで行われた
ファッションショー

© HARUNOBUMURATA 2025 SS COLLECTION

国立新美術館は、芸術を介した相互理解と共生の視点に立った新しい文化の創造に寄与することを使命に、2007年、独立行政法人国立美術館に属する5番目の施設として開館しました。以来、コレクションを持たない代わりに、人々がさまざまな芸術表現を体験し、学び、多様な価値観を認め合うことができるアートセンターとして活動しています。具体的には、国内最大級の展示スペース(14,000㎡)を生かした多彩な展覧会の開催や、美術に関する情報や資料の収集・公開・提供、さまざまな教育普及プログラムの実施に取り組んでいます。

建物の設計は黒川紀章によるものです。

● 略年表

平成 7 年(1995)	文化庁が「新しい美術展示施設(ナショナル・ギャラリー)に関する調査研究会」を設置し、基本構想についての検討を開始
平成11年(1999)	文化庁が「新国立美術展展示施設(ナショナル・ギャラリー)(仮称)設立準備委員会」を設置
平成15年(2003)	全国公募により、正式名称を「国立新美術館」に決定
平成19年(2007)	1月 開館　開館記念展他開催　4月 公募展開始
平成29年(2017)	開館10周年を記念する展覧会等を開催
令和 4 年(2022)	「国立新美術館開館15周年記念 李禹煥」開催

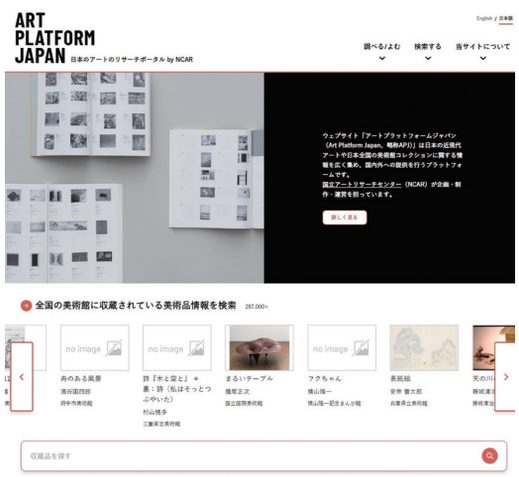
https://www.nact.jp/

独立行政法人国立美術館
国立アートリサーチセンター
National Center for Art Research

撮影：伊藤彰紀

国立アートリサーチセンター長
片岡 真実

世界がグローバルに繋がるなか、私たちは多様な価値観が共存する時代を迎えています。美術館の役割も従来の芸術的価値の保存・展示・普及などに留まらず、多様性、包摂性、持続可能性、ウェルビーイングなどを視野に入れた社会的価値を築く場へと拡大しています。こうした時代に応答すべく、国立アートリサーチセンター（NCAR）が設立されました。「アートをつなげる、深める、拡げる」をミッションに掲げ、アートを社会に広く浸透させると同時に、日本のアートを国内外に発信し、専門性を深めるプラットフォームとして多角的に活動しています。

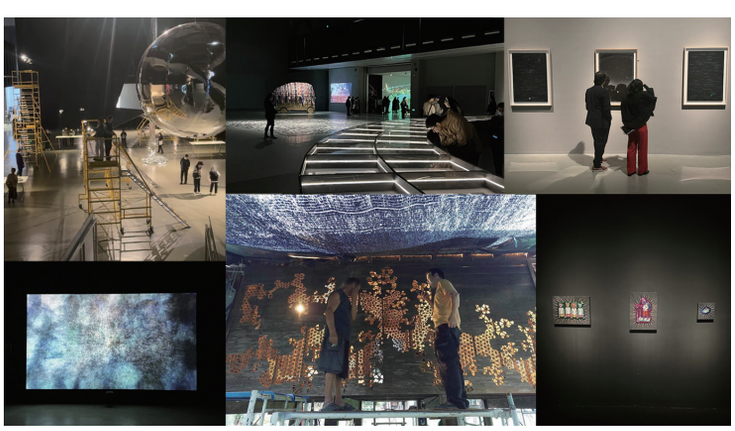


日本のアートに関する総合サイト
「アートプラットフォームジャパン」
日本のアートに関するリサーチ・センター機能のオンラインでの確立を目指し、文化庁より継承したアートプラットフォーム事業サイトを発展させ、総合的リサーチポータル「アートプラットフォームジャパン」を構築しました。

国立アートリサーチセンター設立記念シンポジウム
「ナショナル・アートミュージアムのいま」
アジア・欧米・日本の国立美術館の館長や文化政策担当官らが激動する社会における美術館の新たな役割や課題を議論しました。（2023年11月26日）

令和5年3月28日に設立された国立アートリサーチセンター（NCAR）は、国内外の美術館、研究機関をはじめ社会のさまざまな人々をつなぐ新たな拠点として、専門領域の調査研究（リサーチ）に留まらず、広く社会と連携しながら、情報収集と国内外への発信、コレクションの活用促進、人的ネットワークの構築、ラーニングの拡充、アーティストの支援などに取り組み、日本の美術館活動全体の充実を目指します。

● 略年表
令和 3 年（2021）「アート・コミュニケーションセンター」（仮称）設置準備室開設
令和 4 年（2022）「国立アートリサーチセンター」（仮称）設置準備室に改称
令和 5 年（2023） 国立アートリサーチセンター設立



アーティストの国際発信支援プログラム
国際展に出典する日本のアーティストの発信強化のため、国際展におけるアーティストの活動を支援しました。令和5年度はプレ事業として実施。
（令和5年度に支援した国際展展示風景）

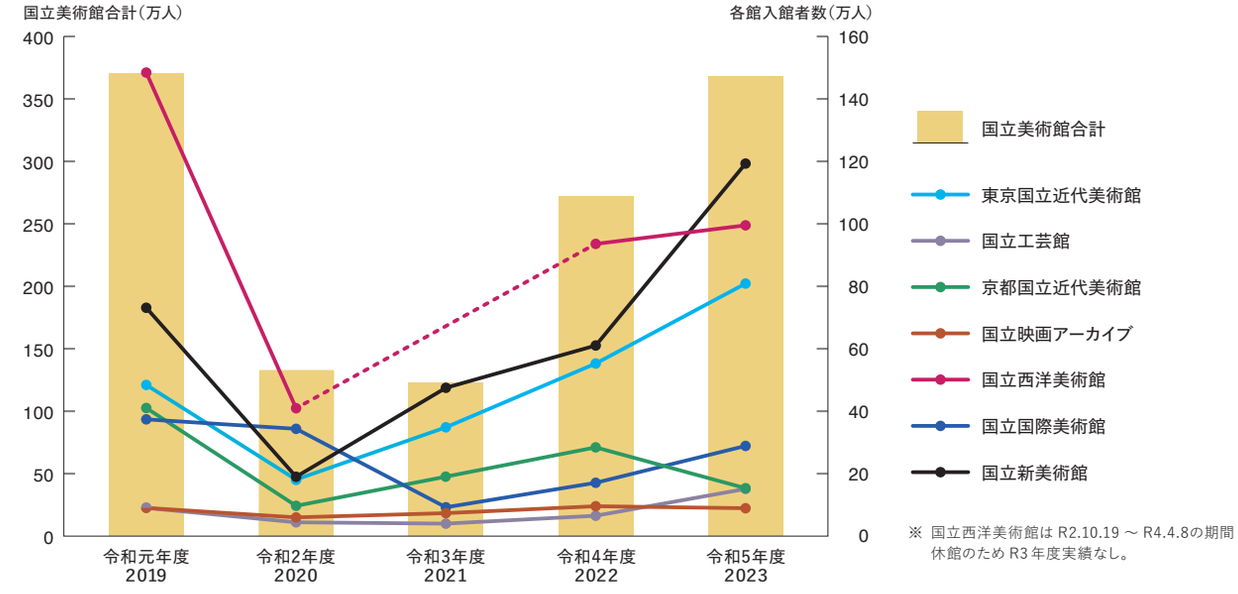
［ https://ncar.artmuseums.go.jp/ ］

1. 国立美術館入館者数（過去5年間）

	令和元年度 2019	令和2年度 2020	令和3年度 2021	令和4年度 2022	令和5年度 2023
東京国立近代美術館	487,501	184,815	355,023	552,805	808,638
国立工芸館	94,509	43,654	40,217	66,300	152,923
京都国立近代美術館	409,302	98,576	188,006	282,073	154,637
国立映画アーカイブ	92,365	59,218	76,058	98,393	93,538
国立西洋美術館	1,485,279	411,136	—	939,047	994,810
国立国際美術館	375,067	343,152	93,486	171,033	287,976
国立新美術館	756,419	193,053	475,764	614,502	1,195,714
国立美術館合計	3,700,442	1,333,604	1,228,554	2,724,153	3,688,236

※ 各館が主催した所蔵作品展・企画展、NFAJの上映会・展覧会の入館者数の合計。
※ 国立西洋美術館は R2.10.19 ～ R4.4.8の期間休館のため R3 年度実績なし。

■過去5年間の国立美術館入館者数の推移



※ 国立西洋美術館は R2.10.19 ～ R4.4.8の期間休館のため R3 年度実績なし。

◎ 公募団体等への展覧会会場の提供（国立新美術館）

	令和元年度 2019	令和2年度 2020	令和3年度 2021	令和4年度 2022	令和5年度 2023
利用団体数	81団体	34団体	81団体	80団体	82団体
入館者数	1,090,575	189,008	485,413	878,858	1,082,300

2. 展覧会等の開催

◎ 所蔵作品展の開催

	令和元年度 2019	令和2年度 2020	令和3年度 2021	令和4年度 2022	令和5年度 2023
開催日数	1,155	781	754	1,127	1,069
展示替回数	24	17	15	19	16
入館者数	1,130,347	370,491	287,226	950,060	1,073,024

コレクションを活用した所蔵作品展では、所蔵作品を様々な角度から鑑賞・理解してもらうため、各館において特定のテーマや開催中の企画展に沿った小企画展、テーマ展等をあわせて開催しています。

◎ 企画展の開催

	令和元年度 2019	令和2年度 2020	令和3年度 2021	令和4年度 2022	令和5年度 2023
開催日数	1,507	1,019	1,081	1,265	1,389
開催回数	29	18	23	24	27
入館者数	2,477,730	903,895	865,270	1,675,700	2,521,674

◎ 上映会の開催（国立映画アーカイブ）

	令和元年度 2019	令和2年度 2020	令和3年度 2021	令和4年度 2022	令和5年度 2023
開催日数	246	243	248	288	291
開催回数	12	10	13	11	12
入館者数	76,592	49,089	58,432	78,091	71,266

◎ 展覧会の開催（国立映画アーカイブ）

	令和元年度 2019	令和2年度 2020	令和3年度 2021	令和4年度 2022	令和5年度 2023
開催日数	235	196	217	255	254
開催回数	3	3	3	3	3
入館者数	15,773	10,129	17,626	20,302	22,272

3. 美術作品及び映画フィルムの収集数（過去５年間）

区　分		令和元年度 2019	令和2年度 2020	令和3年度 2021	令和4年度 2022	令和5年度 2023
美術作品（点）	新規収蔵数	353	536	299	401	538
	作品点数計	44,371	44,873	45,172	45,573	46,111
フィルム（本）	新規収蔵数	2,274	635	2,167	496	843
	作品本数計	83,109	83,744	85,911	86,407	87,250

4. 所蔵作品の貸与数（過去５年間）

◎ 美術作品

	令和元年度 2019		令和2年度 2020		令和3年度 2021		令和4年度 2022		令和5年度 2023	
	件	点	件	点	件	点	件	点	件	点
東京国立近代美術館	56	239	42	141	56	275	75	339	77	306
国立工芸館	10	48	6	27	13	54	12	102	13	158
京都国立近代美術館	57	549	34	221	50	548	58	949	54	1,063
国立西洋美術館	16	61	9	37	6	379	14	61	9	100
国立国際美術館	12	63	15	199	13	137	14	66	18	55
合計	151	960	106	625	138	1,493	173	1,517	171	1,682

◎ 映画フィルム

	令和元年度 2019		令和2年度 2020		令和3年度 2021		令和4年度 2022		令和5年度 2023	
	件	点	件	点	件	点	件	点	件	点
国立映画アーカイブ	85	173	42	73	61	155	81	166	73	132

◎ 映画関連資料

	令和元年度 2019		令和2年度 2020		令和3年度 2021		令和4年度 2022		令和5年度 2023	
	件	点	件	点	件	点	件	点	件	点
国立映画アーカイブ	6	132	3	55	5	138	5	83	9	161

役員等

（令和６年７月１日現在）

理事長・国立新美術館長
逢坂　恵理子　OSAKA Eriko

理事・国立西洋美術館長
田中　正之　TANAKA Masayuki

理事・本部事務局長
石﨑　宏明　ISHIZAKI Hiroaki

理事
渡部　葉子　WATANABE Yohko

監事
田中　淳　TANAKA Atsushi
茶田　佳世子　CHADA Kayoko

東京国立近代美術館長
小松　弥生　KOMATSU Yayoi

国立工芸館長
唐澤　昌宏　KARASAWA Masahiro

京都国立近代美術館長
福永　治　FUKUNAGA Osamu

国立映画アーカイブ館長
岡島　尚志　OKAJIMA Hisashi

国立国際美術館長
島　敦彦　SHIMA Atsuhiko

国立アートリサーチセンター長
片岡　真実　KATAOKA Mami

予算

収入予算額

（単位：百万円）

	令和６年度予算	令和５年度予算
展示事業等収入	1,679	1,504
運営費交付金	8,050	7,739
受託収入	0	0
施設整備費補助金	100	400
寄附金収入	650	650
合計	10,479	10,293

支出予算額

（単位：百万円）

	令和６年度予算	令和５年度予算
運営事業費	9,729	9,243
人件費	1,538	1,246
一般管理費	954	804
事業部門経費	7,237	7,193
受託事業費	0	0
施設整備費	100	400
寄附金事業費	650	650
合計	10,479	10,293

国立美術館へのご寄附のお願い

国立美術館は、日本における芸術文化の創造と発展、国民の美的感性の育成を使命とする美術振興の中心拠点です。美術作品を約４万６千点、映画フィルムを８万７千点以上所蔵し、毎年多くの方をお迎えしています。また、より美術に親しみ楽しんでいただけるよう、展覧会事業や教育普及事業なども積極的に展開しています。皆さまからのご支援により、こうした活動の充実や、次世代への貴重な文化財の継承が可能となります。

◉返礼：一定以上のご寄附をいただいた方に、展覧会の招待券や、オリジナルグッズを進呈いたします。

展覧会・上映会

調査・研究

所蔵作品・フィルムの修復

教育普及

建物・設備の整備

情報・資料の収集

国際発信・連携

税制優遇について

独立行政法人国立美術館へのご寄附に対しては、寄附金控除（所得控除）が適用されます。寄附金受領の翌月に「寄附者情報」欄にご入力いただいたご住所に領収書をお送りしますので、確定申告の際にご利用ください。お住まいの都道府県・市区町村が、条例で独立行政法人国立美術館を寄附金控除の対象法人として指定している場合、個人住民税額の控除を受けることができます。詳細については各自治体の条例をご確認ください。

国立美術館オンライン寄附サイト

寄附の詳細やお申込み方法、各種問合せ等をご案内しています。
また国立美術館各館には、「ご寄附の案内リーフレット」を配置してあります。

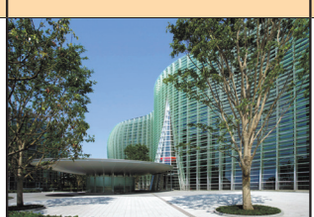
独立行政法人 国立美術館
オンライン寄附サイト
https://kifu.artmuseums.go.jp/

国立美術館では、遺贈を受け付けております。大切な作品を次の世代に確実に残すことができるよう、ご支援をお願い申し上げます。ご関心をお持ちの方は、国立美術館サイトの「美術館へのサポート」ページをご覧ください。

国立美術館サイト
美術館へのサポート
https://www.artmuseums.go.jp/support

各館の概要

	東京国立近代美術館	国立工芸館	京都国立近代美術館	国立映画アーカイブ
施設				
建物 延べ面積	19,050.6㎡ うち展示面積 4,459.0㎡	3,072.22㎡ うち展示面積 703.76㎡	9,761㎡ うち展示面積 2,604㎡	16,479㎡ うち展示面積 1,365㎡ （相模原分館を含む）
所在地	東京都千代田区 北の丸公園3-1	石川県金沢市 出羽町3-2	京都府京都市左京区 岡崎円勝寺町	東京都中央区 京橋3-7-6
役割 ・ 任務	近現代の美術、工芸に関する作品その他の資料の収集・保管・展示・調査研究活動等を実施。	近現代の工芸・デザインに関する作品その他の資料の収集・保管・展示・調査研究活動等を実施。	特に京都・西日本を重点に近現代の美術、工芸に関する作品その他の資料の収集・保管・展示・調査研究活動等を実施。	映画文化振興の中枢的機関として、映画に関する収集・保存・活用・上映・調査研究活動等を実施。
収蔵作品 ※1	14,013点	4,297点	15,131点	106,572本
入館者数 ※2	808,638人	152,923人	154,637人	93,538人
館長	小松 弥生	唐澤 昌宏	福永 治	岡島 尚志
職員数 ※3・4	37人（23人）	8人	16人	16人

	国立西洋美術館	国立国際美術館	国立新美術館	国立アートリサーチセンター
施設				独立行政法人国立美術館 国立アートリサーチセンター National Center for Art Research
建物 延べ面積	17,369㎡ うち展示面積 4,420㎡	13,487㎡ うち展示面積 3,811㎡	49,709㎡ うち展示面積 14,000㎡	—
所在地	東京都台東区 上野公園7-7	大阪府大阪市北区 中之島4-2-55	東京都港区 六本木7-22-2	東京都千代田区九段北1-13-12　北の丸スクエア2階
役割 ・ 任務	仏政府から日本国政府に寄贈返還された松方コレクションを中心に西洋美術に関する作品及び資料の収集・保管・展示・調査研究活動等を実施。	日本美術の発展と世界の美術との関連を明らかにするため、主に1945年以降の現代美術に関する作品その他の資料の収集・保管・展示・調査研究活動等を実施。	国立のアートセンターとして、全国的活動を行う美術団体の展覧会等への会場の提供及び新しい美術動向や現代作家を紹介する自主企画展の開催、国際発信等を実施。	国内外の美術館、研究機関をはじめ関係者と連携・協力し、アート振興の基盤整備及び国際発信と持続的な発展に寄与するため、国立美術館のナショナルセンターとしての機能の強化を図り我が国の美術館活動全体の充実に寄与する。
収蔵作品 ※1	6,521点	8,301点	—	—
入館者数 ※2	994,810人	287,976人	1,195,714人	—
館長	田中 正之	島 敦彦	逢坂 恵理子	片岡 真実
職員数 ※3・4	23人	16人	20人	33人（24人）

※1　収蔵作品は令和6年3月31日現在の数（寄託作品を含む。）
※2　入館者数は令和5年度実績（主催事業（所蔵作品展、企画展、国立映画アーカイブ上映会・展覧会）の入館者数）
※3　職員数は令和6年4月1日現在の常勤職員の人数。
※4　括弧内は法人本部等を本務とする者の人数。

独立行政法人国立美術館本部事務局
東京国立近代美術館内
〒102-8322　東京都千代田区北の丸公園3-1
TEL. 03-3214-2561　FAX. 03-3214-2577
URL. https://www.artmuseums.go.jp/

リサイクル適性Ⓐ
この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。